

平成22年度

# 富山市民感謝と誓いのつどい

とき:平成22年8月1日(日) 午後1時30分  
ところ:富山国際会議場 メインホール

主催/富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

- |              |                |               |
|--------------|----------------|---------------|
| 富山市自治振興連絡協議会 | 富山市社会福祉協議会     | 富山市遺族会        |
| 富山市老人クラブ連合会  | 富山市民生委員児童委員協議会 | 富山市児童クラブ連絡協議会 |
| 富山市婦人会       | 富山市母親クラブ連絡協議会  | 富山市PTA連絡協議会   |
| 富山市小学校長会     | 富山市中学校長会       |               |

## 中学生作文最優秀賞

### 「先人がつくってくれた豊かな富山」

富山市立奥田中学校2年生 米本 大輔

今から六十五年前の八月一日に、アメリカの飛行機B29が富山市を火の海にした。建物で残ったのは、旧大和のビル、電気ビルだけだったという。現在の富山市しかない。僕は、当時の資料を写真で見ると、ただただ驚くばかりだった。さらに、祖母から当時の話を聞いた。

祖母は当時小学二年で、夏休みに大空襲にあい逃げ回っていたという。祖母は、下新町にあった立山重工の社宅に住んでいた。八月一日の夜は星空で、アメリカの飛行機が富山市の空いっぱい飛んできた。爆弾は銀色に見え、地上に落ちた瞬間、火の海になり、住んでいた家も二階に干してあった着物も火の中で燃えていったと、七十二歳の祖母は、当時の様子を語った。

僕はさらに戦争の話をくわしく知りたくなり祖母に聞いた。すると、とてもくわしく教えてくれた。祖母は、自分の通っていた奥田国民学

校がバリバリと音を立てながら燃え落ちていくのを見て、「学校も家も、なくなったよー。」

と大声でさげんだ。その時、田んぼの茂みの中に隠れていた親子五人の中の父親がいきなり祖母を田んぼの中に落とす。すると祖母を的に爆弾が落ちてきた。

「もうちょっと先を歩いていたら、私は死んでいた。そして、たら大ちゃんとも会えなかった。あの田んぼの中の父親のおかげで助かった。」と。祖母が涙を出して僕に言う。同級生の家族全部が赤江川の橋の下で焼死したという。

今、春には、桜の花が満開になり、おだやかに流れる赤江川。六十五年前にこんな悲しいことがあった事も、誰も教えてはくれない。体に着ているシャツを水でぬらせば火の中でも大丈夫だと、皆が入って行った赤江川。八月一日に花火大会があるのも、亡くなった人々を供養

するためと聞く。

祖父は七月三十一日に総曲輪から八尾の方に移っていたから、富山の空襲は八尾の山から見えていたそうだ。富山市全体が火の海で、もし一日遅かったら、家族全員焼死していたと、こわい事を言った。そして、祖母と同じように「あの空襲で亡くなっていたら、大輔にちゃ会えなかったのー。」と話してくれた。

僕はもうやめようと大声を出した。だけど心の中では、そんな焼けの原から現在の豊かな富山になったのは、先人の努力があったからだと思う。豊かな生活は簡単にはつくれないと思う。今こうして僕たちが明るく、楽しく過ごせるのは、富山の復興に尽くした人たちのおかげである。ことは忘れてはならないと思う。この豊かな生活を続けるために、僕たちも頑張らなくてはならない。その前に、まず豊かな富山をつくってくださった先人に、感謝しなければならぬと、戦争の話を聞いて改めて思った。

## 小学生絵画最優秀賞

3・4年生の部



「レトロな空とぶちんちん電車」  
富山市立柳町小学校 3年1組 森田 怜 さんの作品

5・6年生の部



「笑顔あふれる未来の富山市」  
富山市立櫻尾小学校 5年1組 山崎 真奈 さんの作品

## 富山市のあゆみ展

### 日時・場所

7月31日(土) 午前10時～午後9時  
8月1日(日) 午前9時～午後5時  
富山国際会議場 1F交流ギャラリー

### 内容

富山市の歴史の紹介や、市民生活の変遷を写真等のパネルで展示するほか、小学生が描く絵画「未来の富山市」も展示します。

# 「十歳で見た空襲の地獄」

富山市長 大場 喜美子

「富山が焼ける時は全滅だ」と口にされていたように敗戦になった。

青々と広がる田んぼの多い街、富山がすべて灰になろうとは……。もう二週間早く終戦になっておれば、こんなことにならなくて済んだのだにと、子供心にもよくわかった。

夏休みに入ったばかりの八月一日は猛暑。空襲に備えて町内の婦人会は、防空壕造りに汗を流していた。母もその中の一人だった。夕飯はベトついたじやがいを、きれいに洗い、塩煮した粗末なものである。それに誰も文句は言わない。

夜は、昼の熱気が残っていて暑く、電気も制限されて本も読めず、蚊帳の中で寝るだけ。母のうちわの風でウトウトしかけたころ、警報が鳴り響き、飛び起きて外に出た。ドーンと二度ぐらい大きな音を聞いた時、母が「父ちゃん、早く逃げんと」と防空頭巾だけを持って叫んだ。父は、出征していた弟の家族を思いやり隣家に入って行った。

人通りはまだまばらであった。父の来るのを待たず母は私を引っ張って歩き出した。当時私は今の白銀町に住んでいた。途中で近所のおばさんと一緒に、稲荷町から田んぼの中をめっちゃ

くちやに歩いたり走ったりした。秋吉あたりまで行き、ここなら大丈夫だろう、と田んぼのあぜに座り込んだ。

市内は火の海となり、遠くに見えた。火勢は強く、空を真赤に染め、そのはるか上を銀色のB29が、魚が泳ぐ様に動いているのが見えた。十歳の私は母の手をしっかりとぎつて歯の根がガチガチなるのをこらえるため、痛いくらいに口を結んでいた。長い夜を、言葉もなく燃え盛る火の海を眺めながら夜明けを待った。

人の顔が見えるようになって町の中へ戻った。地獄絵図が広がっていた。綾田の二部焼け残った所を通り抜けた。道やら家の跡やらさっぱりわからない。屋根瓦の重なり合う下から、ポツ、ポツと火が噴き出している。大正座のある松川までやとたどりついた。

父は家を出る時、井戸に釜や鍋を放り込み、米を持って出た。そして、わが家の焼け跡に戻るとご飯を炊いて待っていてくれた。家族は父のありがたさを感じた。家族は父のありがたさを感じた。家族は父のありがたさを感じた。家族は父のありがたさを感じた。

父の弟の家族、おばといと四人も無事で焼け跡に戻っていた。逃げ遅れた人たちは、松川に入って一夜をあかし、おぶった赤ん坊に焼夷弾が直撃したとか、川の水がお湯のようになり、その中に一晩中つかっていたため亡

くなった。など、寒気のするような話をいくつも耳にした。

私たちが二家族は、その夜の寝ぐらを求め、知り合いを頼りに大山町黒牧まで行くことにし、南富山駅まで歩いた。途中広貫堂付近の光厳寺には、付近から運ばれてきた死体が、丸太棒の様に無造作に積まれていた。薬学校には学校を守るということで集まった低学年の人たちが多数亡くなり、この人たちの遺体も並べられていた。死体の悪臭の中で炊き出しのオニギリをもらい手づかみで食べる。寝不足と疲れで、どの顔も眼ばかりキラキラ光り、この世の人とは思えない自分たち。満員電車に詰め込まれ、下車した大庄駅からは長い長い道のりを歩いた。目的地に着いたころは太陽も沈みかけていた。

両親は翌朝、村から出た馬車で富山に戻った。私はいとこたちと一緒だったので寂しくはなかったが、朝夕のブヨには泣かされた。皮膚の弱い私は二度刺されると、どれだけでもかゆくて、早く母の所に帰りたいと泣きたいのを我慢していた。

父がバラック建ての家をつくった。焦げた木を四本立て、地面にムシロ二枚を敷き、屋根とその周りを焼けトタンで囲っただけのわが家。そこに戻ったのは戦争が終わった十五日ごろであった。家のすぐ横にあった巨大な三本の桐の木もなくなり、見渡す限りの焼け野

原。所々にポツンと残った土蔵があったが、中に火が入っていて、夜になると火を噴き出し崩れ落ちた。

父は大工だった。いつまでもバラック生活はできないと、十一月に十坪の家を建てた。暖房はこたつ、畳はなくまだムシロ。粗末な作りだったが、周囲の人に「いい家が建ったね。」とうらやましがられた。

五年後、父が五十七歳の時、大好きだった酒も自由には買えないなか、胃がんでこの世を去った。まもなく母もなくなった。

逃げて逃げても焼夷弾に追われ、火の海で焼け焦げになってなくなれた方々を思う時、二度と戦争はしてほしくないと思ってしまう。富山市だけでも二千三百の尊い命が一夜にして命を落としたこの事実を絶対に忘れることはできない。声を大にして平和と生命の尊さを訴えたいと思う。



水見市島尾海岸に漂着した富山空襲の犠牲者を供養するため、現地に建立された慰霊像

# 式典

午後1時30分から

## 1. 富山市の紹介映像

## 2. 「永久の火」入場 とわ 奉持者 富山市立上滝中学校生徒

## 3. 国歌斉唱

## 4. 黙とう

## 5. あいさつ 富山市長 森 雅志

## 6. 朗 読 「私の戦争体験記」から 「十歳で見た空襲の地獄」／大場 喜美子 朗 読／声のライブラリー友の会 土肥 祐子

## 7. 代表献花及び一般献花

## 8. 「永久の火」昇天 とわ